

『くろうみそ』

理学部 4 回生 ルサーク 積民

『ドラえもん』という作品の魅力とは、いったい何だったのだろうか？ 藤本先生の亡き今、それを論じることにどれほどの意味があるのだろうか？ それでも、言葉に起こすべきものが残っているとすれば、それはおよそ次のようなものかもしれない。

「くろうみそ」という短篇がある。全 10 ページのお話のなかで、その知名度に最も大きく貢献しているせりふがある。

「お説教なんておもしろいもんじゃないからね。長ながやると、このマンガの人気がおちる。」

「いや ニページほどやる!!」

このやりとりは秀逸で、そう、秀逸すぎるがゆえに、見過ごされてきたものがある。なめると「なにをするにも、ひどく苦勞することになる」というひみつ道具、表題にもなっている「くろうみそ」をたっぷりなめたのび太のパパは、物語の最後、タバコを吸うために手で火おこしをすることになる。ライターの石がなくなり、マッチもなく、タバコ屋は休みで、喫茶店でマッチをもらおうと家を出ると、外は雨が降っており傘もない始末。それでも、「男が一度思いたったことをあきらめられるか!!」と言い放つパパ。そして最後のコマである。

必死で火おこしに励む父親の姿を前にして、しかしのび太とドラえもんは極めて淡泊に

「これでなくちゃいけないのかしら。」

「人生はきびしいなあ。」

と言い、物語は幕を閉じる。

私たちは時として、のび太やドラえもんを始め、キャラクターの豊かな表情に魅力を見出し、心惹かれてきた。その一方で、むしろ豊かさを失った表情こそが『ドラえもん』の真骨頂ではないかと、ふと思うことがある。この「くろうみそ」はその典型で、のび太とドラえもんの表情は、豊かさとは対極にあると言ってよい。ドラえもんに至っては、自らのひみつ道具が引き起こした結果に対して、どうしてこれほど興味を失うことができるのかという疑問さえわき上がってくる無表情ぶりである。どう見ても、「人生はきびしいなあ。」とは微塵も思っていないであろう薄っぺらい言葉とともに幕を閉じる物語は、『ドラえもん』が本質的にギャグ漫画であることを改めて実感させてくれる。

「これでなくちゃいけないのかしら。」というのび太の言い回しも素晴らしい。現在ではほとんど使われなくなった、男性による発話としての「～かしら」という表現が『ドラえもん』には度々登場するが、現在では主流でなくなった表現だからこその趣がある。

ここに当該のコマを掲載することはしない。ぜひてんとう虫コミックス第 8 巻、または大全集第 3 巻を手に取り、自身の目で確かめていただきたい。